
俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

サラ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

【Zコード】

Z8609X

【作者名】

サラ

【あらすじ】

主人公・足立沙羅は、幼馴染の相川涼輔とともに雷門中に転校してきた中2のサッカー大好き少女。

サッカー部に入部するが、なんと次の日から一週間合宿に行くことになつて……！？

たまーに、というかほとんびギャグっぽいと思います。

シリアルなんて……！ よほど重いときムードの時しか書けないぜ

……。

都合上、南沢先輩が雷門にいます。

ギャグっぽいけど、いちおつ恋愛っぽくしたいなあ……とか。
サッカーしてるとことかほとんど無いよ！

全然原作のストリーとは関係ないです。
オリジナルキャラが出てるのは……もう分かってるか。うん。
まあ、そんな感じのラブコメディーです。

プロローグ・～風～（前書き）

“……も、恋愛小説とか書けるわけねえと思ひてたのに書こちやつた
カラです。
とりあえず、どうぞ見てつけてください。

プロローグ・～風～

「へへ、」ヒロが雷門中か～」

アタシは校舎を見上げていった。

アタシの名前は足立沙羅。

水色のショートヘアで、顔つきは男っぽいとよく言われる。そのせいで、制服を着て登校しようとしてるだけで警察に捕まりそうになるほどだ。

「楽しみだね、沙羅」

アタシの隣でこう言つた少年は相川涼輔といつ。

きれいな金髪とメガネが、太陽の光を反射してきらきらと光つている。

いざ踏み出そうとしたとき、後ろから大きな声が聞こえてきた。

「うわあああああああああ、ぶつかるひつひつひつ……！」

「は？」

ドッサーン！！

叫びながら走つてきた少年と思いつきりぶつかつた。転校初日からこんな不幸続きで、大丈夫だろうかと、少し不安になつてくる。不幸とは、まず登校中に電柱に真正面からぶつかつり、途中で警察に捕まりかけ、その上逃げ回つているうちに道に迷つた。

これはたぶん、アタシが星座占い・血液型占いのどちらも最下位だつたからだろ？。

「ふわあ！ びっくりした……つて、大丈夫ですかー？」

茶色の天然パーマのような髪に灰色の目。

なんか、どこかで見た覚えが……。

アタシはそんなことを考えた。

ぶつかつてきた少年は、まず飛び起き、一歩前に声をかけてきた。

大丈夫、とアタシが返事をすると、少年はほつとしたように胸をなでおろした。

「彼はさつと立ち上がりながら、一人の顔を見つめ、こう言った。

「もしかして、貴方たちって足立沙羅さんと相川涼輔さんですか？」

「何で名前を……？」

当然の疑問を抱く。

「何で俺たちの名前を知ってるんだ？」

「気持ちを代弁するかのように涼輔が言う。

「覚えて無いんすか？ 俺です、松風天馬です！！」

松風天馬。

「そういえば……」

「あ、こないだ河川敷で練習してた……」

「そうです！ そのときボールを沙羅さんに拾つてもらつて

涼輔も納得がいったようだつた。

「ところで天馬。お前、なんか急いでたみたいだつたけど……」

「そう涼輔に言われ、はつとしたように天馬が言つ。

「やばい！ 俺、サッカー部の朝練行かなきや！ じゃあ沙羅さん、涼輔さんまた後で！」

すると天馬は風のように走り去つていった。

「松風天馬……。アイツ、雷門中に風、いや嵐を呼びそう……」

アタシは天馬の後姿を見送りながらそつと呟いた。

プロローグ・～風～（後書き）

……プロローグだからって短い氣がするのは私だけだろうか。

天馬「んなことないし。それより作者は調子に乗りやすいからいい

ところより悪いところバンバン言つてね～」

ありがとうございました～つづきも待つててください～。

天馬「誰も待つてる奴なんていない」と思ひよ～

1話・転入生（前書き）

一日で一話書けるんだつたら、すぐ完結しそうだな。
といつあえずひとひらめく。

「はあ、疲れた」

俺は教室の机に突っ伏した。

「おいおい神童。お前それでもサッカー部のキャプテンかよ」
そう呆れたようにいいうのは、親友の霧野蘭丸。

あ、そうそう。俺の名前は神童拓人。

さつき言われてたように、雷門中サッカー部のキャプテン。
「分かってるさ。でも、昨日は眠れなかつたんだ。そつとしといて
くれよ」

そう答えると彼はさらに呆れたようだつた。

「まあいいけどよ。あ、そういうばさ、さつき職員室前通つたら、
担任と一緒に男みた的な女子がいたぜ」
何だそれは。

あ、これじゃ失礼か。

何だそいつは。

俺は、自分で壊れて行つている気がしてきた。

「俺が思うに、転校生だと思つんだ。担任と一緒に居たんだから、
たぶんうちのクラスだぜ」

「ふーん？」

俺はあいまいな返事をした。

まあ、どうつてことないし。

俺がまた机にうつぶせようと手を伸ばすと、蘭丸はちょっと意地悪
く笑んだ。

「たぶん、お前にとつて刺激的な奴だと思つぜ」

「……？」

どうこう意味だらうかと考えながらも、俺は机にうつぶせた。

その途端担任が教室のドアをあけ入ってきた。
くそつ、寝ようと思つたのに。

担任の隣には、どこかで見かけたような少女がいた。
制服じゃ無かつたら、”少年”と言つても違和感は無かつただろう。
「えー。今日は転入生がこのクラスに来る。……つて、言つてあつたか？」

『聞いてません』

クラス全員が息をそろえて言つ。

俺は言わなかつたけど。

そんな様子を見て、少年のような少女はクスクス笑う。

なんだ。笑うと女の子みたいじやん。

「そうか。まあいいだろ。その転校生つて言つのがこいつ、足立沙羅だ」

そう説明されると、沙羅と呼ばれた少女はニコッと笑つた。
「はじめまして、足立沙羅です。趣味はサッカーと歌うことです。
よろしくお願ひします！」

沙羅と呼ばれた少女は、微笑みながら、年相応の元氣で言つた。
なんだ。声は以外に女の子っぽいじやん。

「よーし、席は……神童の隣な。まあ、空いてる席なんてひとつしかないけど」

沙羅は俺の隣の空いてる席に座る。

きれいな薄水色のショートヘア、きりつとした瞳。

なんか、見方を変えれば美少女だな。

「よろしくね。たつくん」

「なつ……！」

沙羅は、こちらを振り返つて言つた。

『たつくん』なんて、親にも呼ばれたこと無いぞ！
て、いうか何で俺の下の名前知つてんだよ！
まあ、サッカー好きなら知つておかしくも無いけど。
けど……けど……なんでそんなに馴れ馴れしいんだよ！

「くく。やっぱたつくん変わんないね

笑う沙羅。

「ほり、俺の言つてたこと当たつたろ。お前にとつて刺激的な奴だつて」

後ろから蘭丸が囁いてくる。

なんかイラッとした。

後で殴つてもいいかな。親友だけど。

「蘭丸お前」

「そこひるさい。授業始めるぞ」

「はーい」「

蘭丸と沙羅がとぼけたように返事をした。

それが俺と沙羅との2度目の出会いだった。

場所は変わつて、3年教室。

あーあ。嫌な奴と隣になつちやつた。

俺は相川涼輔。

まあ、雷門中に転入してきたけど、一番嫌な奴と隣になつてしまつた。

嫌な奴つてのは、南沢篤士。

あれ？ 下の名前の『し』つてさ、あれで良いんだっけ？

そもそも『あつし』だったつけ？

まあいいや。

「よくねえよ」

あらっ？ 心の声聞こえてた？

まあいつか。

そんなことより。

「おい南沢。四六時中睨みつけてるようなことはすんなよ」

「ふん。その申し出、丁重にお断りさせていただく」

くつそ、あの態度が気にいんねえんだよ！！

「ところでお前、部活やっぱサッカーやんのか？」

「当たり前だ。沙羅が入るつて言つたし、俺も入りたいし。何しろお前をからかえるしな」

「ふん。俺もお前のアホ面見てるの楽しいから、まあいいか」

「何だとこのナルシスト野郎」

「そつちこそロリコンの癖に」

あ、イラッとした。

口つ！ ロリコンとか……ベつ！ 別にそんなんじゃ……
おつほん。

危づくシンデレラぼくなるところだった。

「このメガネ野郎！」

「キザつたらしい女たらし！」

俺と南沢の視線に物理的な力があつたら、火花が散つていたであろう。

「おい南沢と相川！ 授業中にケンカはやめろ！！！」

先生にそう注意されたからには、続けるわけにはいかなかつた。
まあ、今やつているところなんて、前の学校ではとっくに習つたところだつたので、特にすることも無かつたが。

「この決着は後でつけてやる……」

南沢が独り言のように呟いたそれを、俺は聞き逃さなかつた。

まあ、そんなことより俺が何で南沢を嫌つてゐるか説明するか。

それは、今から5年前のこと。

俺と沙羅が公園でボールを蹴って遊んでいた。
と、そこに女子に囲まれてるリア充……つまり南沢がいたわけよ。
うん。

まあ、最初つから知つてたけどよ。南沢のこと。
南沢は女子を全部……じゃ無かつた。

全員追つ払つてから俺の方に来た。

何しにきたのかと思つたら、いきなり沙羅の体を抱きしめるじゃあ
ないか！－！

沙羅、ワケが分からず氣絶。

俺、超激怒。

南沢、腹を抱えて笑い出す。

笑い出す南沢を見て、俺の怒りゲージは満タン。
思わず殴りかかった。

それを見てた女子から悲鳴が上がつた。

「いやああ！ 南沢君があ！」とか、「きゃあああーー！」とかさ。
うん、よく考えるとあいつら、このクラスの女子じゃん。
まあいつかそんなこと。

南沢はよけようともせず俺の拳に当たり後ろへ飛ぶ。
そしたら、動かなくなつたんで様子を見に近づいた。
そしたら顔面をパンチされた。

くつそ、今思い出しだけでも腹が立つ－！
パンチを喰らつた俺を見てアイツは一言。

「人を騙すことも、実力のうちだよ。メガネ君」
そのままあいつは去つていった。

あー、今思い出したのがいけなかつた。
無性に殴りたくなつてきた。

あーイライラする。

イライラする。（大事なことなので2回言いました）ふと隣を振り向くと南沢は眠っていた。

.....

起一せんじて

いた
！」

ざまあみたか。

そういうふうで、田を覚ます南沢。

あ、完全に怒りスイッチ入ってるな。
まあまつと二つ。

その声と同時に、今日の全ての授業の終わりを示す鐘がなった。

よし、
帰るか。

1話・転入生（後書き）

はい。神童・蘭丸・南沢の三人、キャラ崩壊します＼（^○^）／
絶対南沢叫んだりしませんよね。

蘭丸もそんな意地悪そうじやないし。

神童はもうだめだ。

気品が感じられなくなつてゐる。

まあいいや。（よくねえ

感想とかくれたら、部屋中踊つて回ります。（迷惑だ。

それでは近いうちに会えることを祈りつつ。

2話・異様な入部希望者（前書き）

今回も（？）シリアス場面は見られません。
ギャグだらけですがどうぞ。

キーンコーンカーンコーンと、今日の授業全てが終わる鐘の音と同時に、南沢先輩の、

「ねえ、今の叫び声聞いた？」

「うん。南沢先輩の声だつた」

「誰だよそれ」つて言うのはアタシの兄さんみたいな人の事だよ。きっと

「お前、そつちも忘れたのかよ。沙羅といつも一緒にいる、お兄さんみたいな人だよ。相川涼輔つて人」

まあ良い。そんなことより、俺は聞いてみたいことがあった。

「沙羅つて部活何入るんだ?」

そんなことかとが詰うな。

「え？ もちろんサッカー部に決まってるだろ！」
沙羅はカバンを肩にかけながら返事をする。

そうやつてかけるんだ、カバン。

最後の『だる』で台無しだけどね。

「ふーん。ていうか決まってないし」

「アタシの申じゅ渡あいでんの……」

そつ答えると沙羅は満足したようだった。

「分かればいいんだ。それより早く部室連れてつてよー。」

急かす沙羅。

腕を掴んで振り回すんじゃない。

痛いだろ。

それを見た蘭丸が、クスッと笑う。

「それじゃあ行くか

「本当ー?」

その時沙羅が腕を放して突き飛ばしたために、俺はイスから転げ落ちた。

くつそー。

「やつたあ! 早く行こう! くくん!」

あーもうその呼び方やめるとか思つたけどまあいいや。

「分かつたよ」

そうして俺ら三人は、沙羅に腕を組まれ廊下に出た。

「久しぶりだな、お前ら。沙羅、俺のこと忘れてなかつたか?」

そのすぐ後、上から声が降ってきた。

声の主のほうに顔を向けると、そこにはメガネをかけている金髪の上級生が立っていた。

上級生かは知らんけど。勘だよ、勘。

まあ、背が高いからっていうのが理由なんだけど。

「涼輔! 忘れてないよ!!」

沙羅はするつと俺と蘭丸の腕から手を離す。

するとそのままその上級生にダイブっ!

……後ろに倒れた。

すると、その後ろに南沢先輩がいるのが見えた。

あ、居たんだ。

「何気にひどいな、お前」

あ、心の声聞こえてたんだ。

すごつ!

「そいつは心の声、自分の悪口しか聞こえな

グフウ」

涼輔と呼ばれた上級生の声が最後まで聞こえなかつたのは、南沢先輩が腹を蹴つたからだ。

「つるさい黙れロリコン野郎」

「はーー!? それはお前も一緒だろーーー」

ヒートアップする涼輔さんと南沢先輩のケンカ。

それを止めに入る沙羅。

愉快そうに見てる蘭丸。

よく分からぬまま立ち戻くす俺。

……何だこの構図は!?

「Jの金髪メガネ!-!」

「変な髪形!-!」

「何だと!-! 授業終わりに叫んだ馬鹿野郎!-!」

「くウツ ……」

あ、やっぱり叫んだの南沢先輩だつたんだ。
なんかウケる。

「何だとこの金持ち野郎!-! ……ってこれじゃ悪口じゃねえな」

「また心の声聞こえてたんですか。とりあえず何があつたか知りませんが、ケンカやめてくださいよ。こんな廊下で」

俺の一言で一人の先輩は、お互い掴んでいた手を放した。

俺つてそんな説得力あること言つたつけ?

「まあいい。とつあえず神童。お前俺のこと覚えてないだろ

俺キモい。

「たつくんやー、涼輔どーじろかアタシのことも覚えて無かつたよー！」

全くひどい奴だ。」

「お前ツ！」

俺は無意識のうちに沙羅の口を手で塞いだ。

「むがつ！？」

ぶつと噴出す涼輔先輩。

「沙羅お前まだそんな風に呼んでんのかよ」

まだ腹を抱えて笑っている。

「まあいいや。それより覚えてないんだつたら自己紹介と行きますか。俺は相川涼輔。まあ、3年。好きなことはサッカーとか。よろしく」

そう簡単に自己紹介をした涼輔先輩は、少し微笑んだ。

笑うとカツコよさが増すな。

「それよりさー、早く連れてつてよ、部室ー。せっかくサッカー部入つてあげるんだからさー！」

「上から田線やめろよ沙羅。神童連れてつてくれなくなるかもしねいぜ？」

蘭丸が例の意地悪い笑みを浮かべ言つ。

「分かつたよ。とりあえず早く行ー！」

沙羅はまたも言つ。

とりあえずそこにいた皆でサッカー部室に向かつた。

サッカー部室に着いた。

早いわけじゃない。

作者が飛ばしだだけだ。

まあ、アタシはどうつてこと無いけどね！

「部室とかつてこつちに別にあるんだ」

今まで思つていたことを口にする。

「まあ、そなんだ」

神童、言い方えればおばさんぽくなるぞ。そつだつたんだみたいな意味で。

ウイーンと、ドアが開く。

「あ、キャプテン達！」

部室にいた一人、もとい天馬が言つ。

「天馬だ！」

アタシは感情の無い声で言つ。

「沙羅先輩！ 涼輔先輩！ …… ていうかそんな無感情な声で呼ばないでください！」

お、天馬でも気づくんだ。

当たり前か。人間なんだ。

「先輩たちがここに来たつて事は、やつぱりサッカー部に入るんですけど？」

「「当たり前だ」」

涼輔と声が合つてしまつた。

まあいいけど。

「やつた！ 沙羅先輩たちとサッカーできるー！」

天馬は飛び上がらんばかりに喜んでいる。

そんなにうれしいのか。

「んで、お前らはその人のこと知つてゐみたいだけど、俺らは知らないんだから紹介しろよ」

褐色の肌をした、水色っぽい（？）髪の男子がイラついたように言う。

「分かつたよつて言つかもとよりそのつもりだつたし。」うちの水色の髪のは足立沙羅つていつて、俺と同じクラスに転入してきた。それで、その沙羅の隣で南沢先輩とにらみ合つてるのは相川涼輔先輩。南沢先輩と同じクラスだそうです」

「そう神童が説明し終えると、皆納得したといつかなんといつかつて顔をした。

まあ、そうだろうな。

自分で言うのもなんだけど、こんな異様な二人組みがいるんだもん。そりやあんな反応してもおかしくない…………と思つ。

すると部室のドアが開く音がした。

振り返つてみるとそこにいたのは……

「なつ、沙羅！」

あ、先に言われちゃつた。

まあいいか。

「どうしたんだ鬼道、知り合いか？」

「知り合いか、じゃ無いだらうー。覚えてないのかこのアホ！」

「お前！ アホっていうな！ 変な髪形の癖に！」

「何だと！ このサツカ一馬鹿！」

「つるさじシスコン！」

あれ、このパターンどこかで……？

「あー、もう二人ともやめて……！」

二人の後ろにいた紺色のウエーブヘアの女性がケンカを止める。

「もう、なんでこんなところでケンカできるのか知りたいくらいよ！ 子供の前でくだらないケンカしないで！」

「「あ、ああ」」

あ、このパターンどつかで見たことあると思つたら涼輔と南沢先輩のケンカと似てるんだ。

そんなのはどうでもいいや。

「それで鬼道。どこで見つけたんだっけコイツ」

あ、コイツ呼ばわりされてしまった。

別にいいけど。

「コイツ、この前天馬と一緒にいだる。思い出せ」

「あ、そういうやいたなあ」

すつじいのんきだな、おい。

「んで、それが何でここにいるんだよ」

「ちよつ！ それ呼ばわりとかひどつ！」

「まあ、いこじやん。それより何でここにいるんだよ」

「だめだ。どうやつても説得できるような相手じゃない。

「もちろん、サッカー部に入るためです！」

「俺もです！」

あ、涼輔忘れてた。

別に涼輔の影が薄いわけじゃないんだけど、周りの人の影が濃いからさ。

「おい、俺んとこ忘れてないよな。沙羅」

げつ、気付かれた。

「顔に出てるぜ」

くつそつ蘭丸め……。

「何でサッカー部？」

円堂さん、質問の意味がわかりません。

どうやつても今の会話からその質問に繋がらないんですけど

「別にいいじゃないですか」

とりあえずそう答えておく。

「ふーん。お前らサッカー好きか？」

はつ？

意味がわからず田を白黒させる。

「おい、目が点になつてゐるぞ」

蘭丸のやつて、そんなことじつとるわ。

「三秒以内に答える。そーんこー……」

うわつやばい。

「サッカー好きです！」

涼輔ときれいにハモつた。

「よーし、なら良いや。それと、明日から一週間合宿行くぞ」

アタシと涼輔ど二人が、この部屋にいる円堂以外の人物ほとんどが叫んだ。

「お前、今考えたわがじやないだらうな。」「思ひ、一、マソシロ!!」

モード・アーティスト

呼ひ捨てたのは放てて置いてね

「んなわけあるか。たたちよいと驚かそいで思ってただけ」
「俺立はねえよ。」
「あはつ嘔吐めじめはーかー」

「世間一般の意見は、

「良くない。はあ、めんどくせー……」「

お前ら、お笑いやればいいんじやないの?とか思つたのは忘れよう。

「合宿、かあ……。しかも一週間

・轉校二田臣とか笑え……なしが

「でもが、カジカニ端の端の母娘がはるい

何をだよ。

何を頑張るんだ

だから、やつは理解してくれんたるお前で友達一個の話題だつたつつか苦手じやん？ だから、やつ

涼輔はちょっと笑いながら言った。

なが心配してないよ。」が言い方かな
う。

友達作り苦手なのは事実だし。

「まあ、もう二つになるとやがて、今日も練習始めるやー。」

『はい！』

「…………つて、アタシたち放置かよ！」

「落ち着け。アイツはまあほつといて、お前ら初心者じゃないんだ

ろ？ ポジションは？」

「俺がMFで、沙羅はGK以外なら何でも大丈夫……だつたよな？」

「え？ あ、うん」

いきなり話振られたんでびっくりしたけど、まあいいや。

「でも、まあやれっていわれたらできるけど、ほとんど今はFWです」

「そうか。まあ、これに着替える」

そういうてマネージャーらしき女子からコートフォームを受け取り、アタシたちに差し出す。

「着替え終わつたらグラウンドに来いよ」

アタシの手に無理やり押し付け、鬼道は去つていった。

「なんか、無愛想つつうか……。まあいいけど」

「それより早く着替えていいじうぜ？」

涼輔は鬼道に会えて売れしそうだ。

余談だが、涼輔は鬼道にスッゲーマジで憧れてる。

……なんか、キモい。

「あ、あの……」

張りのある声が掛けられた。

「ん？ 何？」

アタシが振り向くとそこにいたのは青いショートヘアの女子。

「ふ、一人ともここで着替えるんですか？」

遠慮がち、とくに少しお驚いたように呟つ。

「そうだけど？」

「ええ……」

女子は何故か引いてるようだ。

「なんか、ダメ？」

「で、でも、男の人と一緒に着替えるんですか……？」

「あ、そういうことか。別にアタシは気になんないけど……」

「んじゃ、俺は行くぜ」

『早ツ！』

涼輔の早着替えは知つてたけど、なんかすこい早い。

「先行つてゐるぞ、沙羅」

そつ言い残すと、涼輔はさつと行つてしまつた。

まあ、いいけど。

それでアタシも着替えてグラウンドに向かつた。

「あ、そういうえば名前言つてませんでしたね。わたしは野薺つて
いいます。よろしくおねがいします！」

さつきの青い髪の女の子が明るい声で自己紹介をする。
すると連鎖したみたいにほかの人も自己紹介する。

まあ、普通か？

「アタシは瀬戸水鳥。んでコイツは山菜園。とりあえずよろしくな

！」

「おつけー。よろしく！」

なんか、水鳥とは氣が合ひそうだな。

2話・異様な入部希望者（後書き）

ケンカシーンが多い気がする。

そして神童のキャラがどうしようもなくおかしい。

拓人「公式のキャラにしてくれよ……」

作者「却下」

蘭丸「おい、俺のキャラは意地悪じゃないんだが」

作者「知らん」

天馬「作者俺より年下の癖に何いばってんだよ」

……「れやつてるといろいろめんどうかいんでやよつなう。

作者除く三人「強引に終わらすんじゃねえ!!」

3話・つるわに「人とバカなアイツ

「だから、嫌だつてば！」

アタシはクラスの女子二人に詰め寄られていた。

「ねえ、お願ひ！　いや、お願ひします！　何でもするからあ！」

ああ、これだから女子は嫌なんだよ。つて、アタシも女子か。

「おねがいだよお～。私もつと神童と蘭丸に近づきたいんだよお～」

今のは青柳由維。

茶髪でショートヘア。青い瞳が輝く。

クラスのなかで一番背が高いとかそういうじゃないとか。

「私もつ！　お願ひ、このとおり！」

そういうて手を合わせたのは如月ルナ。

きれいな黒髪で、こちらもショートヘア。

クラスで一番蘭丸と拓人が好きとか何とかで由維と張り合つてゐる。

「そんのさあ、アタシに相談するよりサッカー部のマネージャーになつたほうが早くね？」

アタシはもう付き合つてられないといつよつに言つ。

すると、由維とルナは目を丸くしたようだつた。

「そつか、それがいいや～」「そうだ、それがいい～」

二人そろつて同じようなことを言つ。

……もう、こんな奴ら放つとこりや。

さて、寝るかと思ったところに時間を知らせるチャイム。ちつ、と舌打ちをして、アタシは授業の準備を始めた。

「……つてことで、マネージャーやるつて。このちのルナは

「一人を紹介したところであんなこと言つたじやなかつたと後悔した。二人がアタシにずっと質問してくるから、ウザイ。つまり、部活まで一緒に質問をされる時間がすうじて長くなるつて事だ。

「うひ、めんどくさい。」

「なあ、んじゃあ由緒は……？」

神童がきょとんとしたようにたずねる。

「もちろん、入部希望です！」

ピースサインをグッと前に出す。

神童の顔すれすれのところに。

「わ、わかつたよ。つーか、やつぱりもちろんなんだ……」

戸惑い気味の神童に、私はささやいた。

「由緒とルナは、アンタのことが好きみたいだよ。良かつたね、モテモテで」

「なつ……！」

神童は一呼吸おくとアタシをいきなり殴りつけた。

「い、痛いじやないか！」

「バカ！　お前が変なこと言つからだろー。」

「何だと……！」

今度はあたしが殴りかかろうとした時、また殴られた。今度は後ろから。

「おい沙羅、お前最近おかしい。そんなすぐ頭に血上るなんてさ」

それは剣城だつた。

「んだよ剣城！　離せっ！」

いつの間にかアタシの手はつかまれ、自由を失っていた。

「へー、剣城とも知り合いなんだ。お前、こここの何人と知り合いだよ？」

子供の声ではない。

ふと振り返る。

「よひ、お前ら」

それは円堂だつた。

あ、円堂で思い出したけど合宿はなんか懲らるとか何とかで明日に変わつた。

それでも急な氣はするけど。

そんなことより。

「監督……って呼ぶのは何かやだから円堂！」

「おいいいいい！ お前、呼び捨てやめろよ！」

「入部希望者とマネージャーやりたいつて奴がいます」

わめく円堂の次は神童。

「おい、アタシが言いたかったのに。まあいや。えーと、入部希望つのはこっちの茶髪の青柳由緒。んで、マネージャー希望つのはその隣の如月ルナ」

二人は居住まいをちょっとだけ正した。

ほんのちょっとね。

「ふーん、また女か……。まあいや。由緒、だつけ？ お前サッカーカー好きか？」

「は？ あ、いや好きですけど？」

予想通り由緒は一瞬驚いたようだが、すぐ返事をする。

「よーし。なら今すぐ特訓するぞ！」

「の前にそっちのルナとかいうやつはどうすんだよ」

「あ、鬼道。んーマネージャーなんだか別に良いじゃん」

円堂軽すぎ。

何か、あたしの知ってる円堂じゃなくなつてきた……。

ふとそのルナのほうを見ると、彼女は神童と蘭丸にすごい話しかけてた。

それを見てる奴らも、蘭丸たちも引き気味。

まあ、あんなに話しかけられて引かないやつはいないだろ。

「よし、気を取り直して練習始めるぞー！」

『はい！』

あ、あたしも行かなくちゃ。

そう思つて皆の後を追いかけ………… むつとしたところをルナに止められた。

「ねえ、神童君と霧野君取らないでよ。それさえ良ければ命の保障はするから

ちょっと、命の保障つて……。

守んなかつたら殺されるわけ?

「まあ取るつてつたつてアタシあんま男に興味ないから。それより早く練習行かないと円堂に怒られるやつ?」

「う、うん……」「

「お前ら遅いぞーーー 沙羅お前グラウンド十周ーーー」

「うげつ、めんどくせえ……円堂一生睨つてやる…………」

ていうかこんなでいちいち睨つてたらめんどくせえな。
そんなことを考えながらちょっと準備体操をして走りだした。

やっと終わつた。

グラウンドが意外にも広いから練習する前に結構疲れた。
一休みしていると、円堂がこっちに来て話しかけてきた。

「よーし沙羅、終わつたみたいだな。んじゃあ皆にペアになつて練習しててつて言つといて。ちょっと俺用事思い出したから。んじゃ

！」

うわあ無責任。

ま、別にいいけどね。

アタシは立ち上がりつてみんなの元へ走り出した。

「あ、沙羅來た」

蘭丸が言つたから俺はちょっとそつこに気がそれた。
それが悪かった。

「痛ツ！！」

顔面にボールが飛んできた。

マジ痛い。

ボールが当たつた衝撃で、後ろに倒れる。

「大丈夫ですか、キヤプテン！ すみません……俺が今のボール蹴
つたんです。ほんとにすみません……」

天馬が謝罪し始める。

今の、天馬のボールだつたんだ。

アイツ、いつの間にあんなにキック力上がつた……？

「おーい皆ー……つてなんかあつた？」

沙羅が何があつたかわからないという顔で訊ねる。

「何でもないよ。それと、何か言おうとしてたみたいだけど何だつ
たんだよ？」

説明する代わりにそう答えると、沙羅はため息をついて、

「円堂が『ちょっと俺用事思い出したからペアになつて練習してて
だつて』

と一息で言つた。

「ふーん。んじや、しそうがない。二人一組でペアになつて練習す
るしかないな」

沙羅から聞いた監督の指示を繰り返す。

「んじや、そういうことでそつちのやつらに言つてくるわ」

そう言つと涼輔さんはちょっと離れたところにいる人たちに伝える
ためそつちの方に行つた。

「なあ、沙羅俺と組もうー」

「あ、霧野先輩ずるい！ 沙羅先輩！ 俺と練習しましようー」

何か霧野と松風が沙羅の取り合いし始めた。

俺は誰と組もう、としばらく考えているとその間に沙羅の取り合いで南沢先輩と涼輔先輩も加わり、すごいことになつた。

「あーもひつひむむこー！ すこし黙れ！ アンタ達とは俺やらないし

！」

沙羅の怒りが爆発したらしく、自分のことを「俺」と言つている。うわー、そういうやつだったんだ。

まあ、見た目と性格からしておかしくは無いけどね。

沙羅は一人でボーッとして浜野のところに何故が行って、「アンタ相手いないんでしょ？ 一緒に練習しよう！」

といきなり言った。

浜野も浜野で、「別にいーよ」と笑顔で答えた。
「すげえ。浜野すげえ。

沙羅が来たの気付いてもいなかつたのにすぐ対応するとか。俺はたぶん無理。

やつぱすごいな……。

「なあ神童！ 由緒と練習しよう！」

いきなり話しかけられた。

しかも後ろから。

振り向くとそこにいたのはさつき入部したばかりの青柳由緒だった。さつきも思つたとおり、俺はすぐに対応できなかつた。

「お、俺？」

恐る恐る訊ねる。

「そう。神童拓人、あんたに言つてるの。一緒に練習しよう？」

「別に俺はかまわないけど……何で俺？」

思わず変なことを聞いてしまつた。

だが由緒は笑顔のまま答える。

「だつて、雷門中のサッカー部のキャプテンと練習できたら、上手になれると思ったから」

「そつか

そうか、「雷門中サッカー部のキャプテン」って、そんな風に見ら

れてるんだ。

何かプレッシャー。

沙羅は浜野のほうに行ってしまった。

仕方ない。神童と練習するか。

そう思つて神童に声をかけようとするといふと、神童は同じクラスの青柳由維と練習していた。

ちつ、しようがない。他の奴を探すか。

誰かいないかなー、と周りを見ていたら、

「せーんぱい！ 一緒に練習しましょーっ！」

……嫌な声が聞こえた。

声の主のほうを向く。

狩屋マサキ。

なんとなく気に入らない一年。

「……何で俺なんだ」

「えー、だつて先輩いじり甲斐があ……じゃ無かつた。先輩サッカー上手いから」

確かに嫌な単語が聞こえた。

いじり甲斐がある？ ふざけんな！

「……わかつた。一人でいるよりマシだ、早く練習するぞ」

本音を飲み込み、別の言葉を口にする。

狩屋は人の悪い笑みを浮かべた。

「そこなくつちや。んじや、俺ボールとつて来ますんで」

「それは俺が行く。つていうかここにあるじゃないか

「あ、本当だ」

舌打ちの音が聞こえたのは気のせいではないだら。

「おい狩屋。練習する気無いんだつたらしなくていいぞ。どうせボール取りに行くフリして逃げるつもりだつたんだろ？」

俺が言うと、狩屋はギクッとしたような顔をした。

が、すぐに平気そうな顔に戻った。

「気付いたならしょうがないですね。わかりました。練習始めましょう?」

その一言で、俺らは練習を始めた。

「はあ……沙羅先輩行つちゃつたか……」

「おい、お前何してんだよ」

俺がぼーっとしていると、剣城が声をかけてきた。

「別に何もしてないけど……剣城は?」

「い、いやつ、べ、別に……あのさ、俺と一緒に練習しないか?」
自分から「一緒に練習しよう」なんて言わない剣城が、珍しくそんなこと言つたから、俺は聞いてみた。

「……それを言つたために? ってか剣城なんで俺と……?」
すると剣城はちょっと照れて、

「そういう気分になつただけだ」

と言つた。

まあ、いいや。

「んじや、早く練習しよー」

「ああ」

「ねえ浜野。何でアンタつてユニフォームの袖まくのわけ?」

「んー? なんとなく」

なんとなくつてなんだよ。

まあ別に良いや。

「なー、俺も沙羅に質問して良い?」

「何？」

「沙羅つて一体サッカー部の何人と知り合い？」

う、それは言いたくない。

ていうか言つめんぢくさい。

そう思つて適当に断ると、「お前聞いてきたんだから答えろよ」と言つてきた。

マジめんぢくせえ。

ま、別に聞かれて困りはしないからいいか。

「うーんと、神童と蘭丸と……ちょっと待て、ここ転入する前から知つてる人？」

「もちろん」

え、何人だろ。

「神童、蘭丸、天馬、剣城、円堂、鬼道、……だから六人！」

「ふーん」

聞いてきたのに別に興味ないといつよつな顔の浜野。

何だコイツ。

こんな意味分からん奴じやなくて、おとなしそうな速水と組めばよかつた。

ま、いまさら後悔しても遅いけど。

「ちゅーか寒い」

「だったら何で袖まくつてるわけッ！？」

3話・つむせこ「人とバカなアイツ（後書き）

どうも、サラです。

どーでもいいんですが、私と小説の沙羅とは無関係です。
あと最初のほうに出てきた青柳由緒と如月ルナっていうのは自分の
リア友です。

こんなウザく無いんですけど。

あとなんかラブコメのラの字もないですね。

次話、やっと合宿に行きます！

4話・天馬の暴走（前書き）

一日で書き上げてしまった。
まあ別にいいんだけど、昨日と比べて短くなりました。

君は、僕の手を取つて笑う。
きれいな髪を風に揺らしながら。
それにつられて、僕も笑う。

君さえいれば、それだけで幸せだった。

僕は、そんな幸せな時間すら忘れていた。

寒い。とにかく寒い。

俺は一人で立っていた。

朝早くから、こんなに寒いのに。

「早いな神童。約束の時間まで一時間もあるぞ」

後ろから声をかけられる。

振り返るとそこにいたのは……。

「監督……脅かさないでくださいよ。とこつより監督が一時間早く

来いって言つたんでしょう?」

「はは、そうだったな。といひでお前、ほんとに沙羅のこと覚えて

なーのか？」

俺の言葉をさらつと受け流し、逆に質問していく監督。

「覚えてないのかって言われても……実際覚えてないものは覚えてないですよ」

俺がそつまつと監督は「やつか」とだけ言つた。

でも……。

「おーい神童ー……つて、監督も一緒にしたか」

「おー蘭丸か。さつきの言い方俺が固ちや悪いみたいに聞こえたんだが」

蘭丸はその問いに何でもないといつよいに答える。

「そんなことないですよ。ただ監督は遅刻しそうなイメージがあつたので、ちょっと意外だつただけです」

「それは逆に嫌だな」

苦笑いをする監督。

「それよりお前ら寒くないか？ 寒いんだつたらキャラバン乗つていいぞ」

俺と蘭丸は顔を見合わせ、

「「じやあ遠慮なく」」

と言つた。

監督はまた苦笑いをした。

俺らはキャラバンに乗り込んで皆を待つことにした。
よし、一眠りするか。

「涼輔ー、置いてくよー？」

アタシは急かすよつに言つ。

「待つてよ沙羅。ていうか自分の荷物くらい自分で持てよー。」

走りながら返事をする涼輔。

何で彼がアタシの荷物を持つているのかつていうと、今朝家を出る前に「ジャンケンで負けたほうが荷物を持つ」というのをやって、涼輔が負けたからつていうだけのこと。

けど何かかわいそうだったんでアタシは手伝つとした。

「わかったよ。手伝うから早く行こう?」

「サンキュー」

荷物が減つた涼輔はすこし安心したようだつた。

「よし、じゃあ走るぞ!」

が、アタシがそう言つとまた嫌そうな顔をした。
アタシはそれを無視して、走り出した。

アタシと涼輔が着いたころには、大体皆集まつていた。

「監督、まだ来てないのが浜野と多分それと一緒に行こうとしてた
速水と沙羅……って、沙羅いつ来た
着くなり神童にそう聞かれた。

「普通に今來たけど」

「あ、そう

神童は素つ気ない返事をする。

「なあ、来てないの浜野と速水だけでいいのか?」

円堂が聞くと、

「あ、はい。その二人だけです

神童が答えた。

「ねえたつくん」

「何」

「眠い」

「なんこと知るか。あ、キャラバン乗つて良いよ」

アタシの言葉に返事をし、ついでに付け足して言う神童。

アタシはわかつたと答えてから、涼輔の手を引っ張つてキャラバンに向かつた。

「おい速水！ 早く走れよ！ 遅れちまつ！」

「誰のせいでこうなつたと思つてるんですかーー？」 つていうか僕が本気出したら浜野君置いていきますよーー？」

ああ、走りながら喋るの疲れる。

ちゅーか速水足速いんだつた。

忘れてた。

「ちゅーかそんなこといいから早く行こうぜーー」

「あーもうわかりましたよーー！」

「あ、あれ浜野と速水じやないか？」

蘭丸がアタシの頬をつつきながら言つ。

くつそ、むかつく。

「蘭丸、それやめてくれない?」

「それって、沙羅のほっぺつづくの?」

首を立てに振る。

「えー、やだ。沙羅のほっぺふにふにして気持ち良いんだもん」「やめろって言つてるんだから、やめてやれよ。嫌われるぞ?」

声の主は瀬戸水鳥。

なんか、天馬の応援をしてるとか聞いたけど、昨日の練習の時の見てたらやうっぽい気がしてきた。

ていうか声でかい。

耳痛くなつたし。

蘭丸は怒られている子供みたいにしゅんとしていた。
ざまあみろ。

すると、

「ふー、間に合つた」

「全然間に合つてしませんよ浜野君。三十分も遅れています」
浜野と速水がやつと来た。

「よーし、みんなそろつたな。それじゃ、しゅつぱーつー!」
「しゅつぱーつー!」

円堂の掛け声に続いて、浜野も元気な声を出す。
ふつ、やつと出発である。

どこのかは知らないが、目的地に着くまでじつじつよつー。

……ということになつた。

これは、狩屋と天馬が提案した。

といつてもほとんど天馬がやりたかつただけのようだが。

「キャプテン、「さ」ですよ！」

その本人、天馬が俺に話しかける。

「さ」「かよ……。

さ……さ……。

「サッカー大好き松風天馬」

「ちよつ、それひどい！」

みんなが笑い出す。

俺も釣られて笑い出す。

天馬だけは拗ねてしまつたようで笑わなかつた。

「んじや俺は「ま」か……」

蘭丸はそういうて考え出す。

「どうしよう、思いつかない」

こういうときにつけて思いつかないようで、唸りながら考える蘭丸は、なんだかちよつとおかしかつた。

「松風天馬じやダメなのか？」

「人の名前はダメです」

狩屋は意地悪そうに笑う。

「じゃあ「松風天馬に振り回される狩屋」

「先輩酷い！」

狩屋より天馬のほうがショックだつたようで、余計落ち込んでしまつた。

「大丈夫か天馬？ 次は剣城だな」

俺は天馬を慰め……たのかはしらないが、剣城にまわす。

「お、俺も……？」

「そう。お前も」

剣城はあらかさまに嫌な顔をしたが、しょうがないといつたように考え出す。

「『モ』か……。『やりたくない』ってなんて』

「何本言ってるんだよ」

剣城の答えに対し、蘭丸は突っ込みを入れる。

別にいいでしょ? 次は誰?」

天馬とは言つてないのに反応してきた。

「別にお前だとは言ってないんだが」

「そ・う・で・す・か！」

なだめようとしても怒りが治まらないようだ。

ちゅーかまたまかよ

「かんはれ速水！」

次僕ですか？」

111

「『ミヅシミヅシ』版の公風書

「ふつざけんなあああああ

「みんな、これから天馬の名前入れないよう」しよう?」

備がそゝ言ふと
みんな詫した

俺はふう、と溜息をつく。

「ところで田堂。どこに向かつてるんだ？」

鬼道はすっと気になつてたんだけど、と言ひよつて詫ねてきた。

「つーんと、まあ、着いたらわかるぞ」

俺が曖昧に返事をしてごまかすと、鬼道は顔をしかめた。
まあ、別にいいよね。

4話・天馬の暴走（後書き）

今回合宿とかいつたけど行く途中で終わってしまった。
まあ、次回にご期待を！ w

5話・沙羅と海と庵と蘭丸と……つい、あへね？（前書き）

「やあ、やつと合面てくれたよ。
とこつか、特訓りしこじしてたつむ？

5話・沙羅と海と俺と圓丸と……って、多くね?

何だここのは。

サツカー部の合宿つてこんなとこでやるのかよ。

着いた場所は

沖縄だつた。

「監督！ 何で沖縄なんですか！？ 意味わからんないですよ！？」
アタシの気持ちを代弁するよつて、神童が大声で言つた。
だが別に気にした様でもなく、「まあいいじゃん」と軽く受け流す

円堂。

まあ別にいいけど。

「よしじやあいくがー！」

「どこにだよ」

ハイテンションな円堂に冷静なツツツツを入れる鬼道。

マジで一人で漫才やればいいのに。

「もちろん綱海のとこー！」

「何でだよ」

「えー良いじやん」

「いや良くねえだろ」

「よつ、久しぶりだな！」

「何か噂をすれば来やがつた！」

「来ちや悪かつた？」

「出来るなら来ないでほしかつた！」

「鬼道ちゃん何気にひどいね～」

「なぜお前が出てくる不動！」

「まあ良いじやん良いじやん」

「何かそのノリでいくと他のやつまで出てきやつた気がするんだが」

「それは考えすぎだぜ鬼道」

「そうだぜ？ まあ佐久間あたりなら出てきそうだけど」「いや、やっぱこれ以上人が増えると困るだけだからやめろ」「えー賑やかな方が良いだろ」

「その性格がイララする」「いやあ、どうも」

「褒めてないんだが」

「すみません、状況教えてもらつていいですか？」

やつとの思いで話に割り込むと、「はあ？ うるせえんだよこの小娘が！」とでもいうような視線を不動と呼ばれた男はアタシに向ける。

「まあ、教えるがその前になぜお前敬語？」

「えー、何となく。といつかそついうセリフをどつかで聞いたことがあつたから」

「意味分からん。えーと状況は……見ての通りだ」

「いや、わからんから」

「一人で意味がわからないことを言い合つ。

アタシの思考までおかしくなつてきた。

「まあとりあえず荷物置いてから砂浜走るぞ！」

円堂、いきなり出でくるんじやない。それより、

「う、海は嫌だ……」

「何？ 沙羅海でなんかあつたの？」

浜野が聞いてくる。

アタシが答えずうつむいていると、代わりに涼輔が答えた。

「沙羅にはいろいろあるんだよ、うん」

……答えになつてはいないけど。

「まあ、その話は追い追い話すよ」

「んじやあ別にいいや。よし、早く行こうぜー。」

そう浜野が言うとみんなが監督が言つたまゝへ走り出していった。

「沙羅に何があつたのかは俺にはわからないけど、早く行こう？ 神童が一人取り残されたアタシに声をかける。

アタシはそれに小さく答え、神童の手を取つて走り出した。

俺は沙羅に手を取られ走る。

沙羅に手を触れられたとき、俺はドキッとした。

男女間という意味もあつたけど、何か別の意味もあつた。

それがどういう意味だったのかは、よく分からない。

ただ、何となく懐かしかつた。

それは、蘭丸のいうように俺と沙羅が幼馴染だつたからかもしだい。
けど、思い出せない。

いつか思い出せるのかな…………？

「あー！ 沙羅先輩とキャプテン手繋いでる！」
天馬のその声のせいで狩屋にボールぶつけられた。

何でこんなときにそんな事言つんだよー！

「どうか狩屋絶対ワザとだる……。

くつそ、むかつく。

まあ、いつもの事だけど。

俺はイラつく心を静めようと深呼吸し、また歩き出した。

「霧野せーんぱ……ぐふう」

最後まで狩屋が話せなかつたのは、俺が腹を思いつきり殴つたからだろつ。きつと。

「何するんですか霧野先輩！ ひどいです！」

「嫌なら話しかけるな。今、最高にイライラしてるんだ。お前の所為で」

わめく狩屋にそつ告げ、俺は足を速めた。

後ろのほうでは狩屋と速水が何か話していた。

「……じゃあ、イライラしてる霧野先輩には近づかないほつがいいつてワケですか？」

俺は速水先輩に確かめる。

「ええ。力がいつも十倍ぐらいになりますから。さつき狩屋君を殴つた時は、本気の五%くらいですかね」

霧野先輩、怖い。

強い。

さつきのでもかなり痛かつたのに、本気出されたら俺死にかけるし。でも霧野先輩にそう言つても「そのまま死んでしまえ」とか言つんだろうな。

霧野先輩にちよつかいを出すの、やめよつかな……？

「ふつ、着いた着いた。よし、皆一 砂浜走るぞー！」

「おー！」

元気なのは浜野一人。

といつか今も走つてきたのに、また走るのか……。

「……それとも海で泳ぐか？」

あ、そっちのほうがマシ。

「何か神童がそっちのまつがマシみたいな顔したからそいつよつー。」

『何その決め方！？』

みんなが突っ込む。

「まあ、良いじゃん。それと、俺に意見するのは許さん。 それじゃおよーぜ！」

監督はいきなりパークー脱いで、中も脱げりとしました。

「おい円堂、ここで脱ぐな」

コーチが冷静に突っ込みを入れる。

ナイスシッコ!!!。

「とりあえず、まだここに荷物置きつけはなしだから、せめて片付けてからにしてくれ」

「ちえつ、わかつたよ」

「う、海はやだあ」

沙羅が半分涙目で言つ。

「じゃあお前何してるんだよー？」

円堂監督が責めるよつて言つ。

「うう……」

沙羅はもつ泣き出しそうだった。

うわー。

神童じゃあるまいし泣くなよ、と俺は思つた。

沙羅はとりあえず着替えたものの、「やっぱり海怖いー」とつて拗ねてしまった。

俺が説得すると、最初よりは嫌がらなくなつた。

そこに円堂監督が追い討ちをかけ、現在に至る。

「一回だけでいいから入れよ。入らないと退部しても」

「入ります」

やつぱり退部は嫌なようだ。

「よーし。それじゃ、蘭丸。後は頼んだぜー！」

「ちよつ、監督つー？」

俺は声をかけるが、監督は走つてこつてしまつていた。

「蘭丸、アタシじや嫌……？」

沙羅が甘えたような声を出した。

その目にはまだ涙がたまつており、いつのまにかしていた。

うつ……、嘘でも嫌とは言えない。

「……やつじやなくて、いきなり言われたからうつとうびつへつ

ただけ。それじゃ、行こうか

「……うん

俺は手を差し出し、沙羅はその手を握った。

5話・沙羅と海と俺と蘭丸と……って、多くね？（後書き）

なんか要領才ーバー。
このや……。

6話・沙羅と海と俺と蘭丸と…………うへ、あへね~その2 (前書き)

入らなかつたんでその2。

「ああっ！？」
沙羅先輩の格好……！

天馬が叫ぶ

俺は思わず天馬が指差す方向を見る。するとそこにいたのは……。

卷之二

無理無理無理無理。

一九四九年五月

機が、の囂一に話でも、上

ヒロニムス・ダニエル・モロッコ、モロッコの文豪。

「ぢよ、
神童大丈夫か？」！？

一九、九〇年九月

だから、蘭丸の声も聞こえなかつた。

といふが蘭丸 よく平気だつたな

というか、何でこういうとき天馬がすぐ発見するんだ……？

「ちよつ、神童大丈夫かつ！？」

アタシを見て神童は、何故かおぼれた。

何でだよ

「沙羅先輩、その格好可愛いです」

「知らないし」

天馬が顔を真っ赤にして言つた言葉を切り捨てる。

つーか、この格好工口いのか？

確かにまあスースーするけど。

神童を助け出そうとする蘭丸を無視して、アタシはちょっとだけ海の中に足を入れてみた。

「つめたつ

足を引っ込める。

「ちゅーかそんなとこ突つ立つてないで早く泳げー！」

浜野がアタシの肩に腕を回し、引っ張る。

まあ、遠くから見たら浜野がアタシにラリアットしたみたいに見えたかもしない。

「ひやあつ！」

いきなり、足を持ち上げられた。

「沙羅軽つ！ なあ、このまま入るぜ？ 用意してろよ」

浜野はアタシをいわゆる……お、お姫様抱っこして、そのまま海に入つていぐ。

「浜野するー！」

南沢先輩の声が聞こえる。

だが特に気にした様でもなく、浜野はそのまま進んでく。

「は、浜野……？」

「大丈夫？ もうすぐ沙羅も浸かると思ひナビ

浜野の声で気がついた。

水面はもうアタシの足先まで近づいていた。
はやいなあ……。

そう思つていたのもつかの間、

「ひやうつー！」

浜野がいきなり足を支えていた手を離した。

アタシは思わず浜野の首に捕まつた。

「……くくつ、沙羅つて面白い……。ちゅーか海の何がそんなに怖かつたん？」

浜野は陽気に聞いてくる。

アタシは何かそれが気に入らなかつたので、思いつきりビンタしてやつた。

ああもう、イライラする。

「いつたあ！ そんなに嫌だつた？ 『めん』

「……別に」

アタシはぷいと顔を逸らす。

と、そこにはニヤニヤ笑う狩屋がいた。

「いいですねえ、仲良くて」

アタシは余計イライラしてきたから、狩屋の頭を思いつきり水の中に沈めてやつた。

その後、上から思いつきり叩いた。

何だつてアイツは人をイライラさせるんだ。

「沙羅、ナイス」

蘭丸がやつて来て言つた。

「ちょうど俺もイライラしてたんだ。助かつた」

「そりやあじうも。けどこんなんで助かつたとか言われてもうれしくもなんとも無いんですけど」

アタシが言うと、蘭丸はクスッと笑つた。

それが女の子みたいで、かわいかつた。

「お前、今俺のことかわいいとか思わなかつたか？」

う、図星。

何でわかつたんだ。

「顔に出てるつて」

浜野が楽しそうに言つた。

うう、そんなに顔に出るタイプなのか、アタシは。

「とりあえず、お前海なんで怖かつたわけ？ もう平氣みたいだけ

ど

あ、ホントだ。

何でだろ？

まあいいか。

「まあ早く教えてくれよー！」

浜野が急かすから、アタシはとにかく思ひ出しながら話した。

「えーと、確かあれは十歳のときかな？ 四年前に涼輔の親に海に連れてつてもらつたんだ。それでアタシが泳いでるときに涼輔がアタシのところをつきアタシが狩屋にやつたみたいに頭を水の中に沈めてきてそれで……そつから覚えてない」

そりやそうだ。…………と思つ。

いや、知らないけど。

「つーかその狩屋はどうした」

「あ、忘れてた」

忘れてたのか。

まあ、俺もだけど。

「あんな奴、ほつとこうぜ？ 関わるとろくな事が無い」

蘭丸が呆れたようになつていうか、本当にどうでもいいよつて。

「んで、沙羅泳げるの？」

いきなり話を違う方向に進めるな浜野。

「うーんと、たぶん無理」

沙羅も乗るなつて、え？

「アタシ、力ナヅチなんだ」

「じゃあ何でお前平気そうなんだよ」

俺が尋ねると、

「狩屋を踏んでるから」

「ふーん。……つて、おい！ 忘れてたんじゃなかつたのか！？」

「どうか狩屋大丈夫なのかよー？」

意外な答えが返ってきた。

「さつき狩屋の話したから思つ出した。まあ別に踏んでるつていつも水の中だし」

いや、水の中だから余計危ないんだし。

アイツ、息してるのか？

とこうかいつの間に踏んだ？

「まあ、アイツは嫌なことからすぐ逃げるし、これも別に嫌じゃなかつたつてことなんじゃないのか？」

なんだかんだ言つても狩屋のこと一番知つてるのは蘭丸な気がする。

「せーいかーい。霧野先輩、よく分かりましたね」

「ちよつ、狩屋のバカツツ！」

沙羅は思いつきり狩屋の類をグーパンチした。

沙羅お前、キーパー出来るんじゃないのか？

出来ないとか言つてたけど。

「それより沙羅、一旦戻ろうか」

俺が言つと、沙羅は首を大きく縦に振つた。

「あー、沙羅先輩ひどいですよー。いきなりグーパンチなんて！」
相変わらず怒つている狩屋にアタシは「ごめん」と一応謝つておく。

まあ、狩屋のほうも一応悪いわけだし。

「んでたつくん、これからどうするの？」

「沙羅に泳ぎを教えようと思つたけどたつくんつて呼んだからやめ

る」

「あーもうわかつたよ。もうたつくんて呼ばないから教えてよー。」

……多分呼ばない。

多分。

そういえば前、蘭丸に「沙羅の多分ほど頼りにならないものは無い」とて言われた気がする。

まあ確かにその通りだけど。

「……本当だな？」

訝しげに聞いてくる神童。

「もちろん！ それじゃあこれからなんて呼ばうが
「今はそんなことより泳ぎの練習だろ？ ほり、こっちに来い
「はーー」

神童が沙羅に泳ぎの特訓をしてる間、俺はさつき一緒にいた浜野、狩屋と一緒に話していた。

「それにしても、沙羅ちゃんって制服は思いつきり似合いませんけど、水着は似合うんですね……」

速水が溜息雜じりに言つ。

「まあそうだね。ちゅーかどこみてるんだよ速水
「確かにそうだ」

浜野の言葉に俺が肯定すると、速水は顔をしかめた。
「全体の雰囲気のことを言つてるんです」

「ちえつ、つまんねえの」

何をつまらながつてるんだ、浜野。

「先輩たち、泳がないんですか？」

後ろから天馬が声をかけてきた。

「まあ、ちょっと休憩してたんだよ。ちゅーかそういうお前は何してんの？」

浜野が逆に訊ねる。

「俺は沙羅のところ見てただけです」

「大胆だな」「大胆ですね」

速水と俺は同じようなことを言つ。

「いやあ、でも松風は元から大胆じゃん？」

「まあ、確かに。でもなあ……」

俺はちょっと何か考てる速水を横目に、沙羅と神童の方を見た。
くつそ、神童が羨ましい。

俺なんか手を握つただけなのに……。

けど浜野は沙羅のとこ抱つこしてたしなあ……。

「何悩んでるんですか？ つたく、先輩らしくも無い」

狩屋がいきなり出てきて言った。

悩んでるのが俺らしくないって……。

お前が悩んでるほうがお前らしくないわつ！

危うく、口から出るところだつた。

「それより、『腹減つたしちょうど匂だし早く飯食おうぜー』って、監督が言つてましたよ」

余計なことを言わず、そつちを先にいつてくれ狩屋。ま、いいか。

「やつた、飯だぜ！ よし。松風、速水、狩屋、行くぞ！」

「俺は無視かい」

「え？ 霧野は神童たち呼んでくるだろ？」

そういうことか。

「んじや先行つてるからな！」

早く飯を食いたくてたまらない2人と迷惑そうな顔をした2人は、走つていつた。

さて、俺は神童たちを呼んでくるか。

「しんどー、沙羅ー、飯だつてよー」

神童とアタシを呼ぶ蘭丸の声が聞こえた。

その声に気付いたのか神童は、ふと顔を上げる。

アタシの顔は、神童の細い手で押さえつけられ水の中。くつそ、アタシの腕より細いのに……！

手に込められていたチカラが、不意に弱まる。

その隙にアタシは水面から顔を上げる。

ふう、やつとだ。

「沙羅、ちよつとは泳げるよつになつたのか？」

蘭丸は昔と変わらない意地悪な笑みを見せる。

「何でそんな顔するの？ まあ、ちよつとは泳げるよつになつたよ」

「へえ、こりや驚いた」

「バカ蘭丸ッ！」

アタシが蘭丸に襲いかかろうとした瞬間、神童に後ろから押さえ込まれた。

「こんなとこりでケンカなんかしてないで、早く飯食いに行ひがせ？」

「うう……」

アタシはしづしづ従つた。

「」はんを食べている最中、アタシは神童をなんて呼ぼうか考えていた。

「どうしたんだ沙羅。元氣ないぞ？」

蘭丸がアタシの顔を覗き込むよつにして話しかけてきた。

「大したことじやないけど、神童をなんて呼ぼうか考えてて……」

「ほんとに大したことじやないな」

「そんなこと言わないでよ。本当に困つてるんだから」

「じゃあ、と蘭丸は人差し指を立てる。

「その一、俺のことみたく下の名前で呼ぶ。その一、浜野のことみたく苗字で呼ぶ」

「それしかないよなあ……」

「その二」

は？ まだあるの？

「茜みたいに『神さま』って呼ぶ。この二つのどれかしかないぜ？」

何だよそれ。

「まあ三は却下させてもいいうね？」

「何でだよ

「それなんかアタシが神童のファンみたいだから

「あつそ」

蘭丸は呆れる。

「はー、アンタって昔から変わらないね。変わったといふといえれば、身長と体重と顔ぐらいだよ」

「お前もさ。あと、涼輔さんも」

「あ、その存在忘れてた」

「バカか」

蘭丸はまたも呆れる。

「バカじゃない。……アタシ達、何も変わってないんだね」

「……ああ。変わったのは」

「神童だけ、か……」

アタシはいろいろ思い出しながら話をつづける。

「アイツ、いつの間に泣き虫になつたの……？」

「それどこから聞いたんだよ」

「天馬から」

「あーあ。せつかくの雰囲気を台無しにしてくれちゃつたよ、天馬」

蘭丸は片手で顔を覆つた。

うーん、コイツ意外とかっこいい。

最近出てきてないけど、由緒とルナが惚れるのもわかる気がする。ちょっとだけ。

まあ遠くで見てる分にはいいんだろ?けど、近くで一緒にいるとすごい危ない奴だからなあ……。

「そういうや神童をなんて呼ぶか考えてたんだよな」

本題を思い出した蘭丸が言つ。

「やっぱ、下の名前で呼んだら?」

なんで?

「だつて、そのほうが神童うれしいと思つたから

「別に俺はどつちでもいい。それと俺は泣き虫じゃない!」

いつの間にか蘭丸の後ろに来ていた神童。

「拓人、来てたんだ」

「やっぱ下で呼ぶな」

「却下しまーす」

「何でだよ」

「だつて皆と違う呼び方がいいんだもん」

「もういい。あ、後十分ぐらいしたら練習はじめるつでよ」

最初つからそれだけを言えッ!

「わかつた。サンキュー」

蘭丸が言つと、神童は去つていつてしまつた。

何か神童いつもと違う気がする。

「どうしたんだ? そんなぼーっとしちまつて」

後ろから声をかけられた。

振り向くとそこにいたのは、円堂が最初会おつと思つてた人物、綱海さんだった。

それにして、この人テンション高い。

「もうすぐ練習始まんだろ? シヤキッとしてけよシャキッヒー。」

元気そうな声で言つ。

テンション高い、ついていけない。

話に割り込む隙が無い。

「まあ、何でもノリと氣力でどうにかなるかー。」

「天馬みたいなこと言つんですね……」

蘭丸はアタシにいつも言つように呆れた口調で言つ。

「天馬? ああ、あの天然パーマの1年か」

「天然パーマつていうなあああああああー。」

天馬のいた場所は、ここから十メートル以上離れている。

そこからなぜか先ほどの「天然パー・マつていうなあああああ！」
と言いながら走ってきた。

聞こえたのもすごいし、速さが半端なかつた。

来るまで多分1秒かからなかつたと思う。

はや……。

だがそれを気にした様子も無く、綱海さんは「わりいわりい」など
と謝つてる。

何なんだこの人……。

アタシは尊敬を通り越して畏怖の眼差しを向けていた……と思う。
なんで気にしないでいられるんだ……。

円堂の知り合いつて、すごい人ばかりだ……。

鬼道は突っ込みまくりだし、円堂の奥さんは料理が超次元だし、鬼
道を『鬼道ちゃん』なんて呼ぶ人はいるし……。
すごいな。

そんなことを考えてたら、午後の練習が始まった。

午後は、サーフィンするとか何とか。

うわー、今度も海か……。

まあ、沖縄にわざわざ来たんだからそれくらいしないと損か。
とりあえず、そう考えておくことにした。

6話・沙羅と海と庵と圓丸と　つい、あへね？その2（後書き）

ああ、なじ2部になつちあつたんだひう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8609x/>

俺の幼馴染は変わり果てていた イナズマイレブンGO

2011年12月29日21時45分発行